

よろずは

平成二六年
七月号

「記紀万葉の故地」シリーズでは、記紀万葉に記された地域にかかわる内容をご紹介します。

記紀万葉の故地 8

大和の都から紀伊国へは、紀路（木路・木道）をとるコースが主要道で、現在の国道24号線と同じく、紀の川沿いを西に進み、和歌山市内へと続いていました。その紀路を大和国から進んでいくと、ちょうど国境あたりに真土山が壁となつて現れます。

亦打山 夕越え行きて 廬前の 角太河原に 独りかも宿む

（訳文）真土山を夕ぐれに越えていつて、廬前の隅田の河原に妻もなく寝ることか。（巻第三の二九八番歌）

真土山を詠んだ歌のほとんどは、紀伊行幸の時のものです。この歌の時の紀伊行幸では、真土山を越えて、「角太」あたりには宿をとったようです。「角太」は、紀年銘入りの人物画像鏡で有名な隅田八幡神社の隅田地域とされています。

ところで、真土山を越えた紀伊側には、万葉歌碑の道が整備され、隅田駅から気軽に巡れるようになってきました。奈良・和歌山県境でもあるこの土地に、ぜひ奈良の人も目を向けていただきたいと思うような場所です。【万葉古代学係】



整備された万葉歌碑巡りのポイントの一つ、県境をまたぐ飛び越え石（間を流れる落合川は、紀の川にそそぐ）

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。